

## 真名子川支流二の沢(仮称)右俣, 中俣, 左俣 1990年10月21日

二の沢(仮称)は、出合から10分と進まないうちに、20mの滝をかける。やっぱりここにもあったという感じである。水量が少ないため、落下する水はしぶきと変わってしまい、迫力のないのが残念である。とても登れるような滝ではないし、左右兩岸とも岩場が切り立っている。左岸から捲くことにしたが、樹林帯であるから登れるといえるほどの急斜面を登り、ルンゼ2つを越えての大高捲き、そして捲りは45mザイルいっぱい空中懸垂となった。

滝の上で二の沢(仮称)は3つに分かれる。本流の右俣はずっとナメが続き、最後は急なルンゼ状となって、落葉の下に消える。中俣は最も小さく、沢中には倒木が多い。やはり最後までナメが続き、ナメの終わった所が沢の終点で、わずかの水が落葉の下からにじみ出ている。左俣もずっとナメが続き、最後は右俣同様急なルンゼ状となって、落葉の下に消える。20mクラスの滝の上はナメという、このあたりの沢の典型的な形態をしている沢である。 (記・

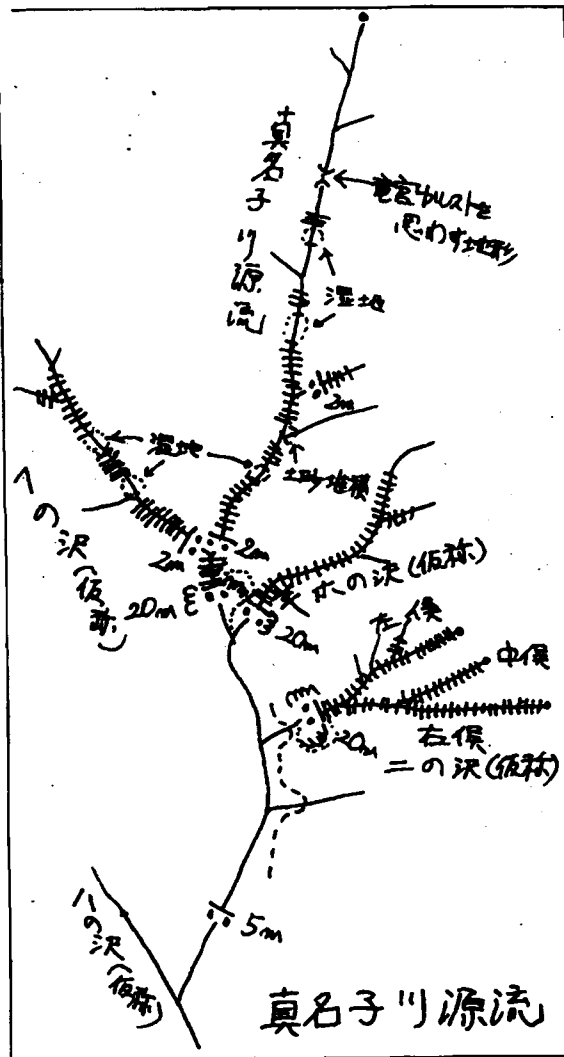
[タイム] 出合(7:00)→右俣終了(7:35)→中俣終了(7:45)→左俣終了(8:00)

## 真名子川支流ホの沢(仮称) 1990年10月21日

二の沢(仮称)出合から10分程遡るとホの沢(仮称)出合となる。ホの沢(仮称)は出合から50m程入り込んだ所に20mの滝をかける。本流の方もやはりホの沢(仮称)出合から50m程上流にこれまた20mの滝をかける。そして、岩壁が2つの滝をほぼつないでいる。両方の滝とも直登不能。捲くしかない。ちょっと思案したが、2つの沢を分ける小尾根に取り付くのがよいと判断。取り付いたところ、この小尾根には踏跡があり、おかげで楽に高捲くことができた。

小尾根上の踏跡が最高所に達した所で右手にトラバースして、ホの沢(仮称)の滝の上に出る。ホの沢(仮称)はこの先ずっとナメが続く。25分遡り、ナメが終わって細いミソと化した所で遡行終了とする。この沢もやはり20mクラスの滝をもち、その上はナメであった。 (記・

[タイム] 出合(8:40)→遡行終了(9:05)



く進行するつもりである。紅葉の始まりかけた樹林帯の中を5分程遡ると最初の滝が出てきた。5m ナメ滝。何本もの白糸をかけたような感じの滝。ここらあたりの沢は、標高700mのあたりで落差20m程の滝をかけるだけだと思っていたので、ちょっともうけたような気分になる。ホールドが豊富なので、右岸を直登して越える。このあとさらに5分程遡ったところが二の沢(仮称)出合であった。本流の方の進行は一時中断して二の沢(仮称)に入る。

二の沢(仮称)の進行終了後、出合まで戻って本流の進行再開。10分程遡るとへの沢(仮称)出合となる。への沢(仮称)は出合から50m程入り込んだ所に20mの滝をかける。本流の方もやはりへの沢(仮称)出合から50m程上流にこれまた20mの滝をかける。両方の滝とも

直登不能。ここは捲くしかない。2つの沢を分ける小尾根に取り付いたところ、この小尾根には跡跡があり、おかげで楽に高捲くことができた。

本流の20m滝の上はやはりナメ。そのナメを50m程進むと、への沢(仮称)出合である。ここで本流進行をまた中断して、への沢(仮称)に入る。

への沢(仮称)の進行を終えると、再び出合まで戻って本流の進行を続けるが、ここまできると本流の方ももう狭い流れとなっている。そしてナメが終了。この先はもう細い流れとなって、随所に湿地が出てくる。どこで進行終了にしようかと考えながら進んでいたら、ちょっと変わった地形が出てきた。沢が湿地帯の中をトンネルとなって流れているのである。規模は比較にならないが、尾瀬の竜宮カルストと全く同じである。湿原地帯ではともかく、沢の源流でこんな地形をみ